

外傷・外科治療後の患者さんへ

外科治療や外傷後の傷あとは必ず残ります。どんな名医が治療しても、傷跡は程度の個人差はあれ必ず残ります。しかし、傷跡を最小限にする管理工夫は可能です。

なぜ傷跡が残るの？

傷が治る際に、「**再生**」と「**修復**」の二つの機序で傷が治癒します。

再生：細胞分裂で細胞コピーを増やして、傷を治します。「**再生**」した場合は組織が元通りになり傷跡は残りません。

修復：結合組織や毛細血管からつくられるセメントのような「**癒痕組織**」で傷を埋めて治します。

人間は再生能力が極めて低く、傷のほとんどは修復にて治癒します。治癒後は、セメントの役割をした**癒痕組織**が残ります。**癒痕組織**は時と共に減少しますが、完全に消えることはありません。そのため、**癒痕＝傷跡**が残ります。



再生では元通りになります

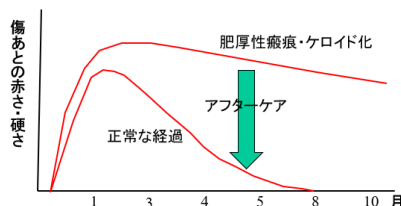
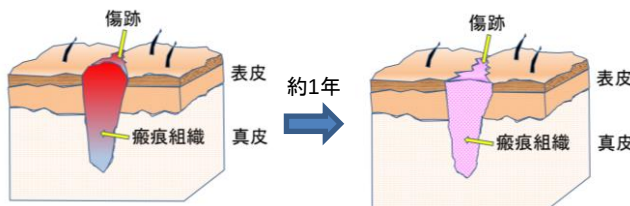


修復では傷がふさがるだけです

傷跡の経過

傷が治癒した後も、**癒痕組織**は平均1〜2か月は増え続けます。そのため、最初の1〜3か月は、傷跡が赤く目立ったり、硬かったり、少し痛かったりします。

1〜3か月を過ぎると、少しずつ過剰に作られた結合組織と血管が減少します。個人差がありますが、1年くらいかけて正常な量まで減少します。傷跡がなじむのに1年近くかかるのはそのためです。



受傷2か月後



約1年



しかし、まれにいつまでも傷跡の赤みが消えなかったり、硬さや盛り上がり改善しない場合があります。時には傷跡がどんどん増大し、赤みが強くなる場合があります。こういう状況を**肥厚性癒痕・ケロイド**と呼びます。

こうなる原因は**体質**、糖尿病・アトピーなどの**基礎疾患**、傷の**重症度**、傷の**部位**、傷にかかる**物理的な力**、**不十分なアフターケア**など様々です。

肥厚性癒痕

赤く・隆起した傷跡



ケロイド

増大する傷跡

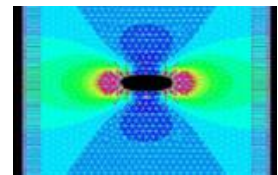


傷跡と部位の関係

体の部位によって傷跡の残り方が変わります。**肥厚性癒痕**や**ケロイド**は、**胸部**、**肩**、**下腹部**などに好発するといわれています。この部位では、上手に傷の治療ができて、**ケロイド・肥厚性癒痕**が発生することがあります。

傷跡と物理的刺激の関係

常に傷跡に緊張が加わる部位、常に動き刺激がある部位などには、**肥厚性癒痕**や**ケロイド**が起きやすいといわれています。



日本医科大学形成外科ホームページより引用

傷跡と紫外線の関係

よく傷跡に日の光をあてない方が良いと聞いたことがあるかもしれませんが。傷あとがなじむまでの期間に紫外線を多く浴びると、同部位のメラニン色素沈着が増えて「**しみ**」が傷跡として残る可能性があるからです。

アフターケア

傷あとの治療

傷あとについて

外傷・外科治療後の患者さんへ ～より良い傷跡のためにできること～

傷跡と
向き合おうよ
だって人間
だもの

内服治療: 傷跡に有効といわれる内服薬を摂取します。トラニラストという薬が主に用いられます。漢方薬などを用いることがあります。

外用療法: 塗り薬や張り薬を用います。主にステロイド成分が入った薬を外用します。

注射療法: 肥厚性瘢痕やケロイドに対してステロイド注射を行う、盛り上がりを改善させます。

レーザー治療: 傷跡の状態に応じたレーザー治療を行う場合があります。

手術療法: 目立つ傷跡を切除して、形成外科の方法にて傷を縫合閉鎖します。

放射線治療: 重症ケロイドの場合は、手術と組み合わせて行う場合があります。

これら治療を組み合わせることでオーダーメイドで治療します。

実際の症例(手術+放射線治療)



下記にURLにもう少し詳細を掲載しています

URL: http://www.med.oita-u.ac.jp/keisei/feature_05.html



直接ご相談希望の場合は、下記のアドレスに電子メールいただくか、形成外科を受診ください。

傷あとに関するご相談先: 大分傷あと相談室
Email: kizuato@otsuka-mc.jp

大分大学附属病院形成外科受診希望の方
Tel 097-586-6880 (6881) 電話受付14:00-16:30
毎週月火水午前中 (当院完全予約制です)

大分大学附属病院形成外科作成

治癒後から傷跡がなじむまでの期間(半年～1年)はアフターケアが必要です。

遮光: 顔や手背などの日光が当たる部位は「シミ予防」のために遮光します。医療用のテープによる保護や日焼け止め(SPF30以上)などを用います。

サプリ(ビタミンCなど)接種: 前述のシミ予防に有効です。

傷あとのテープ保護: 前述のとおり傷跡への物理的な力から傷跡を守ります。様々な専用のテープがあります。テープかぶれに注意が必要となります。



詳しくはこちらまで

カバーメイク: 前述のとおり、必ず受傷後1～3か月は傷跡が赤く目立ちます。その期間はカバーメイクなどで傷跡を目立ちにくくすることで日常生活の支障が減少します。



詳しくはこちらまで

保湿: 傷跡は乾燥しやすく、乾燥も物理刺激となります。保湿することが重要です。市販の塗り薬も有効です。

サポーターなど: よく動き部位ではサポーターなどにて圧迫・安静とすることで傷跡への物理刺激を減らします。

下記URLにもう少し詳細を掲載しています

URL: http://www.med.oita-u.ac.jp/keisei/feature_05.html



しっかりアフターケアしても残った傷跡が生活に支障になる場合は、医療機関を受診して治療を受けることができます。